

# パートナーシップで進める名古屋の生物多様性の取り組み ～COP10から10年間の成果～

2010年の生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の開催地となった名古屋市は、日本三大都市の一つで、日本の中部地方の文化・産業の中心都市として発展してきました。

名古屋の自然に目を向ければ、東部の丘陵地の森や緑地には、固有の植物が分布し、南西部にはラムサール条約登録湿地である藤前干潟が広がるなど、多様な生態系が形成されています。

渡り鳥の重要な中継地である藤前干潟は、名古屋の環境を象徴する場所です。ここはかつてごみの埋め立て処分場の建設が計画されていました。しかし、埋立に反対する声が日に日に高まり、1999年に名古屋市は埋立計画を断念し、その代わりに大幅なごみ減量呼びかける「ごみ非常事態宣言」を発表しました。その後、2年間で20%という目標を市民・事業者・行政のパートナーシップにより達成し、この危機を乗り越えました。

この成果が認められ、この地域は、2005年には自然の叡智をテーマとした愛知万博、2010年のCOP10、2014年のESDユネスコ世界会議の開催地として選ばれるとともに、ごみ非常事態宣言で培われたパートナーシップが今につながっています。

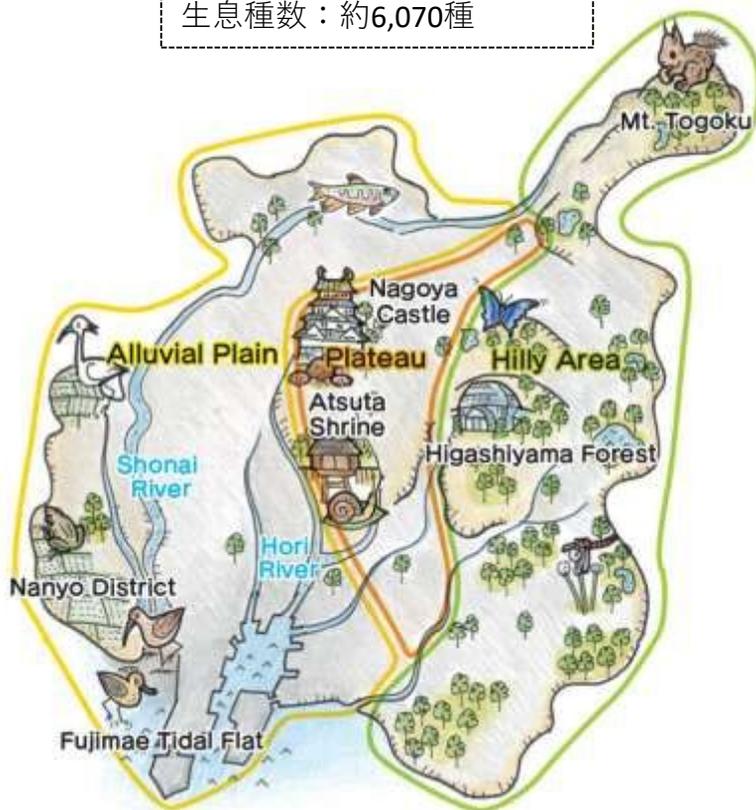
名古屋市では、COP10の翌年に市内の生物多様性を保全・再生していくための拠点として「なごや生物多様性センター」を設立し、多くの市民とともに生物多様性を保全する取り組みを進めてきたほか、市民団体、企業、教育機関等においても、様々な良い取り組みが生まれています。

2030年のSDGs、2050年の自然と共生する社会の実現に向けて、このCOP15の開催を機に決意を新たにし、市民、事業者との皆さんとともに、多様な生物と生態系に支えられた豊かな暮らしが持続していく都市を目指していきます。



# 名古屋市の生態系

面積：326 km<sup>2</sup>  
 人口：233万人  
 平均気温：摂氏17度  
 降水量：1,555mm  
 生息種数：約6,070種



ナゴヤダルマガエル



カワバタモロコ



アカギツネ



シラタマホシクサ



チュウシャクシギ  
 Photo Credit：H.H



スナメリ  
 Photo Credit：名古屋港水族館



ニホンイシガメ



ハッチョウトンボ

# 【成果1】身近な自然を保全・再生するための拠点とネットワークができ、市民協働による調査・保全活動が進んだ

COP10をきっかけにより活発になった身近な自然を守り育てる市民の活動を継続・発展していくための拠点として、2011年9月に「なごや生物多様性センター」を設立しました。また40以上の市民団体・専門家等で構成する「なごや生物多様性保全活動協議会」を設立、市民協働による保全活動に取り組んでいます。



協働による  
調査・保全活動



参加、協力、助言



市民・専門家・学校・行政・その他関係機関



生物多様性センター：作業室



市民参加の活動



写真提供：日本政府

なごや生物多様性センター設立のきっかけとなったCOP10

## 名古屋の生きものに関する情報の集積と発信

### 【情報収集と発信の拠点】

拠点施設ができたことで、生きものに関する情報が集約できるようになりました。市民協働による調査の結果に加えて、市民からも日々情報が寄せられており、その数は年500件以上に及びます。

これらの情報は生きもの情報ポータルサイトに掲載したり「なごや生物多様性ガイドブック」として刊行するなどして、市民の皆さんに分かりやすく伝えています。

また、生きものが存在した証拠を残すため標本の作製・収蔵も行っています。



藤前干潟に漂着したスナメリの解剖と標本化



植物標本



生きもの情報をまとめたガイドブック  
(編集：なごや生物多様性保全活動協議会)



GIS画像（アライグマの選好環境）

### 【レッドリスト・レッドデータブック】

本市では2002年から絶滅の恐れのある野生生物のリストであるレッドリストを作成、5年に1回の頻度で更新しています。

作成にあたっては専門家による調査に市民が協力することもあり、希少な生きものに関する情報として環境アセスメントなどにも活用されています。

環境の悪化や植生の遷移による生息・生育環境の変化、調査の進展による新たな種の追加など掲載種数はゆるやかに増加しています。



レッドデータブック

### 名古屋市のレッドリスト掲載種の推移

絶滅のおそれのある種の数	名古屋市版レッドリストの発行年			
	2002	2010	2015	2020
植物	155	167	182	197
動物	123	178	207	216
合計	278	375	389	413
前回発行時からの増加数		67	44	24



希少種：マメナシ

## 市民協働の調査・保全活動

### 【なごやの生きもの一斉調査】

市民の皆さんに身近な自然や生きものに関心を持っていただくことを目的として、2011年から毎年対象種を決め、市内各地で一斉に調査を実施しています。これまでアリ、陸貝、セミ等の調査を行い、延べ3,000人以上の市民が参加しています。調査により市内未確認の生物種が発見されることもあり、名古屋の生態系の解明に寄与しています。



なごやの生きもの一斉調査の様子

### 【池干し】

池干しはため池の水を抜き、堆積した泥の除去や護岸等の修理を行う日本の伝統的な管理方法です。近年では、生態系を回復するために行われることが増えています。

なごやには100を超えるため池があり、都市部における生態系の拠り所となっていますが、外来種の魚やカメなどが増加していることから、なごや生物多様性センターでは市民団体・地域住民等と市内各所で池干しを実施、延べ4,000人以上の市民が参加しました。



池干し

### 【外来種防除】

名古屋市内には数多くの外来種が息息・生育しています。中には既存の生態系の脅威となるものも存在することから、それらの防除を行っています。

#### ○ ミシシippアカミミガメ

市民団体・研究者等と協力して捕獲方法の確立を進めてきました。この取組みは環境省の「アカミミガメ防除の手引き」で先進事例として紹介され、捕獲罟は日本各地で使用されています。

#### ○ オオキンケイギク

防除方法をまとめたチラシを作成し、公園の管理を行う市民団体に配布したり、普及啓発を兼ねた市民参加の抜き取り会を行ったりすることで、生育地の拡大を防いでいます。



ミシシippアカミミガメ



ミシシippアカミミガメの防除



# Partnership with residents

## 【希少な生きものの保全】

### ○カワバタモロコ

カワバタモロコは、コイ科の小型淡水魚であり、環境省により絶滅危惧IB類に指定されています。

生物多様性センターでは、区画整備事業によって生息地を失ったカワバタモロコを一時的に保護し、繁殖させ個体群を維持しています。

また、大学生が指導役となり小学生とカワバタモロコの飼育・繁殖を通じた環境学習を行うなど、人材育成にも取り組んでいます。



カワバタモロコ



飼育水槽での繁殖



大学生による小学校での授業



小学校での保全

### ○ササユリ

ササユリは、数十年前まで身近な植物でしたが、名古屋市では絶滅危惧IB類に指定されています。自生地は主要な緑地に残るのみであり、そのうち2か所の緑地では、2017年時点で開花個体がそれぞれ3個体と0個体となっていました。

生育環境調査とその結果に基づく保全活動を進め、2020年には、開花個体数をそれぞれ30個体と16個体まで増やすことができ、これらの場所における当面の絶滅を防ぐことができました。



ササユリ



幼苗の計測



個体計測

## 連携・交流とネットワークづくり

生物多様性の保全に向けた市民団体や事業者、研究教育機関、専門家等の取り組みを促進するため、毎年「なごや生物多様性センターまつり」を開催し、ブース出展により日ごろの活動成果を紹介したり、高校の生物部等によるステージ発表の場を設けるなど、相互の連携・交流を図るとともに、市民の皆さんが自然や生きものへ関心を持つきっかけづくりの場を提供しています。



なごや生物多様性センターまつり

## 【成果2】パートナーシップによる緑のまちづくりが進んだ

緑豊かな街並みの形成に向け、市民や事業者・行政の協働により、緑の保全と創出に関する取り組みを進め、多くの市民が緑のまちづくり活動に関わっています。

### 都市における緑の確保

名古屋市は日本ではじめて一定規模以上の建築物に対して緑化を義務付ける「緑化地域制度」を2008年に決めました。

制度開始から2020年までに531.5ヘクタールの緑が確保され、都市の生活環境改善に貢献しています。

また、民有地の優良な緑化事例を顕彰・PRする制度により民有地の緑化を促進しています。



民有地緑化事例

### なごやの森づくり

市内の樹林地や湿地において、市民協働により里山環境の保全・育成や、自然とのふれあいを推進するなど、次世代に引き継ぐ「なごやの森」を育てています。

本市の南西部に位置する戸田川緑地では、2000年度から市民・事業者・行政のパートナーシップにより、苗木を植え、豊かな森を育てる「西の森づくり」を推進してきました。

今後も引き続き間伐や下草刈りなどの育樹活動に取り組み、豊かな森を次世代に引き継いでいきます。



植樹



西の森づくりによって形成された樹林地の変遷  
(左2001年度・右2018年度)

## 【成果4】協働による環境教育・普及啓発が進んだ

生物多様性の主流化に向けて、様々な分野、立場の人たちの協働により、環境教育や普及啓発の取り組みが進みました。

### なごや環境大学

なごや環境大学は、愛知万博が行われた2005年に開学し、市民・市民団体、企業、教育機関、行政が協働で運営する、日本国内でもユニークな学び合いのネットワークです。

様々な分野、立場の人が講師となり、開学以来、これまでに2200回以上の講座・セミナー等が開催され、27万人以上の人々が参加しています。

生物多様性の分野においても、毎年様々な講座が開催されており、また、講座を発展させる形で有志のグループが街中の身近な自然や外来種の調査・研究などを行っています。



ワークショップ



里山での自然観察講座



オンラインセミナー

### 環境デーなごや

毎年9月に開催される市内最大級の環境イベント「環境デーなごや」では、生物多様性やごみの減量など様々な環境問題に取り組む150程度の市民団体等が成果を発信し、お互いに学び合う場として開催しており、毎年10万人以上の市民が参加しています。



環境デーなごや

### なごやグリーンウェイブ

5月22日の国際生物多様性の日には一斉植樹を行っているほか、小学校での生物多様性について学び植樹を行う授業などを行っています。また、2019年には、幼稚園児の手形アートを用いた生物多様性及びグリーンウェイブ活動のPRを実施しました。



一斉植樹



出前授業



名古屋駅のデパート入口にある20フィートの人形

# 【成果3】市民運動の高まりにより名古屋がフェアトレードタウンに認定され、活動が広がった 8

名古屋市をフェアトレードタウンにしようとする市民運動が2011年頃から活発化し、5年にわたる草の根の活動により、2015年に名古屋市がアジア・日本で2番目のフェアトレードタウンに認定されました。

名古屋ではフェアトレードの考えを広く捉え、開発途上国はもとより、自分たちの地域や地球環境に対してもフェアであることを目指し、「地球とのフェアトレード」を合言葉に、まちぐるみでフェアトレードを推進しています。

## 地球とのフェアトレードの推進

名古屋市をフェアトレードタウンにしようとする市民運動が2011年頃から活発化し、5年にわたる草の根の活動により、2015年に名古屋市がアジア・日本で2番目のフェアトレードタウンに認定されました。

名古屋ではフェアトレードの考えを広く捉え、開発途上国はもとより、自分たちの地域や地球環境に対してもフェアであることを目指し、「地球とのフェアトレード」を合言葉に、まちぐるみでフェアトレードを推進しています。



フェアトレードタウン認定式



フェアトレードタウンなごや  
応援ロゴマーク



イベントでの啓発



小学校での授業と給食へのフェアトレード認証製品の使用



## 高校生・大学生の取り組み

名古屋では学生の力がフェアトレード推進の大きな原動力となっています。学生グループが地域や企業と協働でフェアトレードの商品開発や普及活動を行うなど、様々な場所でフェアトレードを広める活動を精力的に行っています。



高校生によるフェアトレード  
ファッションショー



高校生が開発したフェアトレード商品



## 【成果5】名古屋とつながる上流域との連携が進んだ

名古屋では、過去より木材や飲み水などの恵みを、木曾三川（木曾川、長良川、揖斐川）の流域から受けるとともに、人や資源の交流が盛んに行われてきました。COP10の開催と名古屋城本丸御殿の再建を機に、流域圏の連携が一層深まりました。



木曾三川流域図

### 本丸御殿復元事業「市民による森づくり」

2018年6月から全面公開された名古屋城本丸御殿の復には、多くの木曾地方のヒノキ、いわゆる「木曾ヒノキ」が使われました。

木曾・裏木曾地方は、かつて尾張徳川藩の領地でした。17世紀に城下町建設に伴う大量伐採が続いた結果、森林資源の枯渇が深刻化します。そこで森林資源保護を目的に伐採を禁止し、ヒノキなどの植樹が進められたことから森林が再生し、現在に至っています。

2008年から先人が守ってきた自然環境と森林資源を後世に伝えるため、名古屋市民による植樹・育樹活動である「名古屋市民の森づくり」が行われており、2019年には名古屋城において木材の由来を説明する講座体験プログラムが行われました。



名古屋城本丸御殿



市民の森づくり



講義風景

### 木曾三川流域自治体連携会議～水でつながる命～

COP10を契機に、2011年に木曾三川流域の自治体により、木曾三川流域自治体連携会議を設立しました（2020年4月時点で4県下46自治体が参加）。市町村長等が他の流域自治体を直接訪問し、意見交換等を行うサミットや上中流域の生産者と下流域の仕入れ企業との商談会、流域住民が水源地を訪れて植樹などの水源地を保全する事業などを行っています。



木曾三川流域自治体サミット



商談会



植樹

## あいち・なごや生物多様性ベストプラクティス

愛知目標達成に向けた生物多様性の保全や持続可能な利用に関する取組を総括し、さらなる取組の促進につなげるため、COP10以降に愛知県・名古屋市で行われた取組事例を募集し、優良事例の共有を図りました。そのうち、名古屋市内の取組を紹介します。

### 市民団体・NPO

#### 藤前干潟を守る会

1984年、名古屋市の廃棄物処分場のための藤前干潟埋立計画に対し、渡り鳥の貴重な飛来地である干潟の保全活動を始めました。シンポジウム等の開催、生物調査による干潟の水質浄化力の確認など、干潟保全に大きな役割を果たしました。現在は、生物の減少等の課題への取組、藤前干潟の案内人の養成、次世代への継承のためのプログラムを実施しています。



干潟での観察会



アナジャコの巣穴調査

#### 山崎川グリーンマップ、 あいちの海グリーンマップ

本市では、戦後70年の間に開発や都市化などの環境の変化により絶滅してしまった生きものが多いですが、科学的な証拠は殆ど残っていません。名古屋市中央部を流れる山崎川や愛知県の海において、小学生や中学生が地元のお年寄りから子供の頃の生きものについて聞き取り調査を行い、資料としてまとめました。



地元の高齢者への聞き取り

#### 藤前干潟クリーン大作戦実行委員会

2000年代、藤前干潟は、ペットボトル等の流域からの生活ごみでおおわれていました。2004年に干潟に流れ込む河川で活動している4つの市民団体で藤前干潟クリーン大作戦と呼ばれる清掃活動を開始しました。約16年で合計31回開催し、地元住民、企業、行政等延べ参加人数37,770人、集めたごみは45リットルのごみ袋合計46,082袋になります。



清掃活動



回収されたごみの一部

### 企業

#### 株式会社三五

自動車の部品メーカーである株式会社三五は、自然と共生する社会を目指し、森づくりを国内外の工場に展開しています。名古屋市中心部の工場跡地において森とビオトープを創出し、近隣の子供が自然に触れることができる都会の貴重なオアシスとなっています。



ECO35植樹



ECO35の森とビオトープ

## 企業

### 株式会社山田組

名古屋北東部で生物多様性を重視した環境保全型農業の実践と都市農業とふれあえる場を創出し、継続的に活動しています。例えば、農薬を殆ど使用しない物理的・生物的な防除対策を組み合わせた手法による果樹の生産や有機肥料の開発、障害者の就労体験の受入れ、市民への農や自然体験の機会の提供を行っています。



農園の様子



農園での活動

### チームYMO

( (公財) 名古屋市みどりの協会、  
(株) 山田組、 (株) オオバ)

名古屋市南西部にある公園「農業文化園・戸田川緑地」では、20年間にわたる市民・企業・行政の協働による植樹・育樹活動により、様々な生き物が生息する森やピオトープが創出され、都会の里山空間として希少種の保護や親子が参加できる環境教育講座を行っています。



戸田川生態園



水辺のいきもの観察

## 教育機関

### 愛知商業高校ユネスコクラブ

愛知商業高校ユネスコクラブでは、持続可能なまちづくりに貢献するため、校舎の屋上で養蜂活動を行っています。地元企業と共同で採れたはちみつを使用した社会貢献型商品の開発の他、高校生ならではの視点からSDGs(持続可能な開発目標)をテーマとした社会的課題解決に繋がるイベントの企画・運営を行い、地域を巻きこみながら活動を発展し続けています。



養蜂



エシカル消費体験ツアー

### 南陽高校NanyoCompany部

南陽高校では、課外活動として、地域や企業を巻き込んで、買い物という身近な消費行動からSDGsの達成に貢献する取組みを行っています。例えば、藤前干潟と渡り鳥で繋がるフィリピンの地域住民の手芸品を販売し、その収益金の一部をマングローブ植林活動に寄付する仕組みを作っており、これまで1,270本の植林につながりました。



開発した商品



商品販売・啓発